

震災を振り返って

校長 庄子 修

1 東日本大震災発生直後の状況

震災時は翌日の卒業式準備のために、1・2年生約600名と50名ほどの職員が、それぞれ別々の場所で準備作業にあたっていた。地震直後、校庭に生徒を集め点呼をした後、迎えに来た保護者には生徒を引き渡した。その後、周辺の道路等の安全を確認の上、担当教員引率のもと、町内会ごとに一時避難所まで集団下校を実施した。

間もなく、近隣住民が本校に避難してきたため、避難所開設の準備に入った。体育館の椅子を片付け、町内会ごとの区割りを行った。その間、避難者を一時武道場に収容した。仮設トイレの組立ては、集まってきた卒業生が率先して行った。日没が迫る中、前年度の防災訓練での経験が生きた。

町内会の役員も集まってきた。実は、2週間前の2月25日、本校を避難所としている6つの町内会長等に集まって戴き「避難所開設運営委員会」を設立し、役員と役割、体育館内の区割りなどを決めただけだった。それが功を奏した。

その夜、避難者は約1,200名となった。備蓄の避難者カードは不足し、人数の把握に苦労した。(翌日は教職員の手で名簿を作成。)発電機と燃料の確保も課題となった。食料の配給は断念した。

武道場には畳があるために、高齢者や乳幼児専用と事前に決めており、ある時点でそれ以外の避難者は体育館に移ってもらった。批判を覚悟していたが、混乱はなかった。授乳室等も準備した。

断水となり、プールの水をトイレに運ぶ作業を、避難してきた生徒と教職員とで行った。真っ暗な中、理科室にあった豆電球の小さな光は大きな役割を果たした。自ら工夫し、献身的に動く教職員に、感謝の言葉が寄せられ、それが士気を高めた。

翌朝からアルファ米の炊き出しを始めたが、避難所以外の住民も列に加わったため、全ての方には行き渡らなかった。3日目からは、自衛隊による救援物資が到着し、広く配給することができた。

避難所運営は、当初町内会の役員と教職員で行っていたが、4日目、避難民が150名程度となって場所を武道場1か所に縮小してからは、リーダーを選んでもらい、一部を自主的な運営に委ねた。

2 被害の状況

隣の小学校に比べ、本校の損壊は小さかった。それでも校舎全体に入ったひび割れの総延長は2,500mに達しており、校舎のつなぎ目もほとんどが損壊した。中庭も10cmほど陥没していた。

また、受水槽が大きく損壊し、修理するまでの8か月は別系統の管から水圧だけで4階まで送水した。なお、保護者を含め人的な被害はなかった。

3 学校再開に向けて

普通教室は、授業の再開を想定して避難場所に開放しなかったため、いつでも使える状態であった。しかし、続く余震やトイレが使えないことなどから、卒業式は1週間遅れの3月19日に時間を短縮して行い、1・2年生は翌週の3日間、2時限のみの登校として、修了式を迎えた。

職員は、生徒の住居確認や避難所運営支援の他、通信票、指導要録の記載や、途中で終わった教科指導の今後の準備等に追われた。この間、ボランティアに参加した生徒の数は、延べ千名を超えた。被災地支援として本校の避難所に派遣された新潟市の職員の方々には、心から感謝を申し上げたい。

避難所は4月3日に閉鎖され、学校は4月11日からスタートできたが、最初の1週間は昼食確保等の問題もあり、午前授業とした。

4 現状と課題及び今後に向けて

大地震後、生徒を保護者への引き渡しとするか、引率付きの集団下校とするかについての判断は難しかった。そこで今年度は、保護者の事前選択に委ねた。その結果は、おおよそ半数ずつであった。

避難所運営については、事前に「避難所開設運営委員会」を立ち上げておいたことと、「学校支援地域本部事業」で培った地域との良好な関係によって、スムーズな運営ができた。

今後の防災教育については、生徒が自ら判断し自ら身を守る力の育成が必要であると痛感した。

生徒には、震災から学んだことを心に刻ませ、次代への「語り部」としての役割を意識させたい。そしてこの生徒たちを、故郷の復興に貢献できる若者に育てることが私たちの使命であり、それが全国からのご支援に対する恩返しであると考えている。